レジリエンスをパッチワークする

総合生存学館 5 年生
土田　亮

この数年でレジリエンスという言葉を目にすることが本当に多くなった。2022 年度に出版された日本語の書籍で見れば、『レジリエンス人類史（稲村・山極・清水・阿部編, 2022）』や『レジリエントな社会（マーカス・K・ブルネルマイヤー著, 立木・山岡訳, 2022）』といった心理学や人類学、環境学など実に多様な側面から検討された本が出版されている。これらを通観した私見としては、レジリエンスは他分野にもまたがり得る包括的で多様な概念でありながら、各学問から見えるレジリエンスの問題点の提起と他学問との協働のありようを結び合わせる考え方は少なかった、ということができる。おそらく、これは今後のレジリエンスに関する研究で学際性を検討する際に必要なパースペクティブだと考える。また、レジリエンスを分野の特殊性として語るのではなく、多様性へと開かれた普遍性としての人間や社会、自然の関係のあり方を明らかにすることもありうる展開として予期される。

翻って、私にとってこの 2022 年度は非常に刺激的であり、挑戦的でもあった。その理由は大きく 2 つある。

第一に、この JST-NSF プロジェクト(日本-米国：SDGs や仙台防災枠組の優先行動に即し、人間中心のデータを活用したレジリエンス研究)下の「レジリエンスに基づく事前復興のためのガバナンス枠組みと実践モデル -複合災害に焦点を当てたシステムズアプローチ-」（研究代表：寶馨 京都大学名誉教授）」に携わったことである。このプロジェクトの主なアプローチの特徴は、学術や研究を通して生み出される知だけでなく、様々な地域の文脈を重視しながら地域の人たちの経験や教訓を重ね合わせ、「木を見て森も見る」方法を通して、日常から有事に使える情報に、行動に繋げていくことである。文献調査やフィールドワーク、ワークショップ・シンポジウムを通じて得たつながりや気づきは、どれも新鮮であった。特に、やっかいな問題の最前線に立ち、汗をかきながら解決の仕組みづくりを試行錯誤する地域の人たちや実践者・研究者たちには本当に頭が上がらない。私はこのプロジェクトの一環で佐賀県武雄市に訪問することがあった。非常に短い期間であったが、立て続けに起きた九州北部豪雨であらわになった武雄市の民間災害ボランティアセンターや高齢者福祉施設における実態や課題、その経験や教訓は貴重である。その解決に向けた実践は頭で考える以上に驚きに満ちていた。もちろん、その背後には語りづらい苦難やコンフリクトなどがあったと想像する。引き出された経験や教訓に加えて、悲喜交々をいかに書くか、いかに解決に向かっていくか――それはそのうち何かの形で表に出てくると思うし、今その努力をチームでやっている。その結実した未来に期待していてほしい。

第二に、このプロジェクトの傍ら、私の研究や博士論文の執筆を並行していたことである。これは両輪の関係のように、私の研究にもそしてプロジェクトにも新たな発想が生まれていった。そ

の一つは 2022 年 9-10 月のスリランカの短期フィールドワークと 11 月に行ったワークショップである。その構成はこうである。まずフィールドワークでは、洪水災害の復興や COVID-19 といった感染症災害の絡まり合いを見ようとした。ところが、2022 年に入ってスリランカの情勢は陰影を帯び、同国は財政破綻により国家が崩壊していた。都市部や農村部ではその影響の濃淡の差はあれども、多様な社会や人々、生活のままならなさに対して私はフィールドワーク中、事情をわかっていながらずけずけと人々の暮らしを垣間見ることの忍びなさを感じざるを得なかった。そこで徹底的な観察やインタビューの方針から断片的ながらも偶然居合わせた人たちの語りに着目する方へ転換し、そこからどのような現実の難しさに直面していたり、その難しさを逸らしていたりするのか、その実践や考え方に漸進的に迫るようにした。そこには創造に富んだ問題のやり過ごし方があり、地域のレジリエンスのありようを垣間見たように感じた。その成果の一部をワークショップで報告するとともに、これらの考察もまたワーキングペーパーとしてまとめているところである。

さて、ここまでプロジェクトをメンバーや現場の人たちや関わった先生たちとともに走ってきたことを踏まえて、一つ私の中でふと生まれた言葉が「パッチワーク」――すなわち、つぎはぎとか、縫い合わせである。例えば、何か新しいものを立ち上げることや古き良きものを再訪し、それを現代なりに編み合わせるといった営みは、一見綺麗なフローワークに見える。しかし、そう綺麗なことだけには収まらない。布の縫製で考えれば、その実、素材は綺麗だけれども、その縫い目はよく熟練されていなかったり間に合わせの手作業であったりするがゆえに、それほど十分に仕上がっていないことがある。けれども、人々は時にそれを手に取りじっくり観察し、「味がある」「温かみを感じる」「手触りがよい」と称揚することもある。パッチワークを見て、真似をしたりもっとこうしたらいいと技を教えあったり、良さを周りの人たちに広げてみたりもする。こうしたアプローチが、冒頭の既存研究に対して、人間と社会と自然の相互作用に関する解像度を上げたり、事例研究にとどめず共通する参照フレームに拡張したりするのではないだろうか。

私がこれまでスリランカや佐賀県武雄市フィールドワークから見えた現実を足場にすれば、レジリエンスは元々地域や社会の中に埋め込まれてあることだけでも、新しく出現することだけでもないかもしれないと考える。むしろどちらでもあり相補的、つまり、地域や社会にある積層された文化や歴史、環境、社会経済体制、技術、制度などの複雑なコンテキストを、ある危機的な事象に対応、適応、緩和するために、あらゆる主体（それは人間だけによらない、非人間も含みうる）が縫い合わせるかのように即興的に協働的に創出されると感じる。そして、そのつながりを手がかりとして、この縫い合わせから頑健で硬直的な社会に対して、今すぐに変えられはしないけれども、どうにかできないかと人々は批判的に現実から学び合い、レジリエンスのもつ許容力をもってゆるさや豊かさを育みもたらす。

パッチワークというアナロジーは、レジリエンスの観点からいえば、隙間をデザインするという行為や思考につながる。散逸された要素の問題点を見つめ、その要素を解決することで他の問題の絡み合いにならないように何度も結び直し、地域の文脈に布置する。そして、地域固有のものとして留めることを超えて、具体的な知や経験、教訓を引き出すことで学習や振り返りを深めていく。そうして作られていく地域やコミュニティの文脈を新たな場所や人とともにつなぎ直して

いく―――回性の経験としてではなく、工夫に満ちたり失敗を含む日常の中で絶え間なく調整したりする持続的な実践へと展開する。この１年間だって振り返ればそうだ。現実のままならなさにああでもない、こうでもないと試行錯誤しながら、スリランカや武雄市といった現場と政策を行き来しながら、防災をテーマに人類学と公共政策学と対話しながら、人のお話や本などから不意に受け取る言葉と身体の感じ方に鋭敏になりながら（時には鈍感にも？）、その多面性に折に触れレジリエンスをパッチワークしてきた。
振り返った道程を見ると、随分と知らない間に前に考えたことが遠くに旅したような、でもいつだって現場や人が近くにあるような、混ざり合ったものが一枚のつぎはぎの布のように織り込まれている。レジリエンスは縫い合わせていく、人も思いも場所も、ここから何を始めていくかも。